

第1章 特別支援教育の視点

私の「原点」 養護学校教諭として学んだこと

今、私が学生や先生方の前でさまざまに語っていることの「原点」は、養護学校（現・特別支援学校）の教諭として18年間、子ども・保護者・同僚などとかかわってきた経験にあります。肢体不自由養護学校9年、知的障害養護学校5年、病弱養護学校4年、教諭として勤めるなかで、子どもとのかかわり方、指導の仕方として、いくつかの大切にすべき視点が少しずつ見えてきたのです。ここでは、それを4つの「特別支援教育の視点」として、紹介します。

【特別支援教育の視点】

- 視点1：子どもの教育的ニーズを丁寧に把握する
- 視点2：スモールステップによる支援を大切にする
- 視点3：子どもの小さな変化・成長を大切にする
- 視点4：子どもを複数の教師で「観る」

これらの視点に立ちながら、通常学級に在籍する「気になる子」にかかわることで、彼ら彼女らの笑顔はきっと増えてくるでしょう。また、これらの視点は、「気になる子」の周りの子にかかわる際

にも効果を発揮し、結果的には学級に在籍するすべての子に効果的なユニバーサル（普遍的、万人向け）な支援につながります。

なお、「気になる子」というのは、LD（学習障害）、ADHD（注意欠如・多動性障害）、ASD（自閉症スペクトラム障害）などの発達障害のある子、それらの障害の特性のある子、家庭環境上の問題を抱える子のことです。これらの「障害」や「問題」はいずれもグラデーションで、どの子にもある種の偏りや、そのときに抱えているいろいろな「課題」があるのは当然ともいえます。そうした子どもを「障害児」とか「問題児」という言葉にしてしまうと、状況に応じた柔軟なかかわりが見えなくなってくるのではないかと思うのです（もちろん、はっきりした診断によってこそ、見えてくる手立てもありますが）。それに、私がこれまで学校現場で出会った子どもたちはみな、思い出に残るかわいい子どもたちでした。そんな子どもたちに思いを馳せながら、私はこの、子どもを愛でる響きのある「気になる子」という言葉を使っています。

以下、私の「引き出し」から取り出した視点について、みなさんのお考えとすり合わせながらお読みください。



視点1：子どもの教育的ニーズを丁寧に把握する

「ニーズ」とは、『明鏡国語辞典』によると「必要、要求」とあります。2007年、学校教育法の一部改正により、特殊教育から特別支援教育への転換がなされて以降、文部科学省の通知などをはじめ、さまざまな教育関係資料のなかで「教育的ニーズ」という用語を目にするようになりました。

1984年、肢体不自由養護学校で教員生活のスタートを切った私は、重複障害の子どもたちと日々かかわるなかで、「A君が座位を保持するには…」「Bちゃんが定時排尿するには…」等々、それぞれの子どもたちが教育を受ける際に必要なこと（教育的ニーズ）が少しずつ把握できるようになりました。このように、私のニーズ把握が進んだのは、T T（チーム・ティーチング）を組んでいたベテランの先生方の助言があったからです。

児童養護施設を舞台にした小説『明日の子供たち』（有川、2014）のなかで、「あとでね」「待ってね」と言われるとパニックを起こす女子中学生のエピソードが出てきます。その女子中学生とのかかわりに悩む若手職員に対して園長先生が「（その中学生に）待ってもらうときは待つ時間を決めてあげてちょうだい。『あとで』と言う代わりに15分とか30分とか具体的に区切って」と言葉をかけます。この園長先生の言葉から、若手職員は、その女子中学生の教育的ニーズが「具体的な時間の見通し」であることを心に刻みます。

どうでしょうか、みなさんは今、かかわりのある子どもたちの教育的ニーズを把握できていますか？ 「自信がないなあ」と思ったときには、初任の頃の私や小説内の若手職員のように、周りの先生方からの助言を受けてみてはいかがでしょうか？ そうした助言に学ぶうちに、丁寧なニーズ把握が少しずつできるようになります。



視点2：スモールステップによる支援を大切にする

たとえ重度の知的障害があり、文字を読むことが困難な子どもを前にしたとしても、親や教師であれば誰もが「いつかこの子が文字